

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第70輯

軽部池西遺跡Ⅲ

都市計画道路大阪・岸和田・南海線建設に伴う発掘調査報告書

1 9 9 1

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第70輯

かる べ いけにし
軽部池西遺跡Ⅲ

都市計画道路大阪・岸和田・南海線建設に伴う発掘調査報告書

1991

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序 文

軽部池西遺跡は、岸和田市今木町にあります。この一帯は、今木廃寺、今木遺跡、山ノ内遺跡など多くの遺跡が集中しており、主要地方道岸和田牛滝貝塚線などの調査でそれぞれの遺跡の内容が明らかにされてきています。

今回の調査は、主要地方道大阪岸和田南海線の建設にともなって行われたものです。調査区のすぐ東側は、和泉市となって行政区が異なっているため、小田遺跡と呼ばれていますが、本来は、今木遺跡をはじめ近接しているこれらの遺跡は、一連のものと考えべきものです。発掘調査の結果でも、これまでの調査で予測されていた縄文時代の河川などが確認されています。

今回の調査は当初、今木遺跡として実施しましたが、調査区の所在地が厳密には、大阪府の遺跡分布図の上で、軽部池西遺跡の範囲に属しているため、本書では「軽部池遺跡Ⅲ」として報告することにいたしました。本書の調査成果が、この地域の歴史の解明の一助になれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、岸和田市教育委員会、大阪府教育委員会、地元自治会をはじめとする関係者各位に多くのご支援とご協力を賜り、深く感謝をしております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成3年8月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
理事長 仁賀奈 祐 吉

例 言

1. 本書は、都市計画道路大阪・岸和田・南海線建設に伴う、岸和田市今木町所在の軽部池西遺跡発掘調査報告書第三冊である。
2. 発掘調査に伴う機械掘削等請負工事及び写真測量委託の遺跡名は「今木遺跡(その3)」であったが、大阪府文化財分布図によると「軽部池西遺跡」であるため本調査が当遺跡の3次目に当たるということで遺跡名を『軽部池西遺跡Ⅲ』として報告した。
3. 調査は、大阪府土木部より委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
4. 現地における調査は、調査課第1班班長 西口陽一(6月まで)、技師 亀田 学を担当者として1991年6月12日から8月27日まで実施した。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府岸和田土木事務所、岸和田市教育委員会、今木町自治会他地元諸氏には、格別の配慮を得た。現地調査および遺物整理にあたり、山本 彰、大野 薫、宮野淳一各氏(いずれも大阪府教育委員会)には有益な助言・教示を賜った。記して感謝する。
6. 本書に記載する平面図の位置は、国土座標第Ⅵ系の値をkm単位で表示した。方位は座標北を示す。標高は、東京湾平均海面(T. P.)をm単位で表示した。
7. 本書の執筆・編集は、亀田 学が行った。
8. 遺物の写真撮影、焼き付け等は、小倉 勝氏の手を煩わした。

本文目次

第I章 調査の経過と方法	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の方法	1
第II章 遺跡の環境	3
第III章 調査の成果	6
第1節 基本層序	6
第2節 弥生時代の遺構	6
第3節 縄文時代の遺構	8
第4節 出土遺物	12
第IV章 まとめ	15

挿図目次

第1図 調査地位置図	ii	第2図 縄文・弥生時代主要遺跡地図	2
第3図 南西壁柱状土層図	6	第4図 弥生時代遺構配置図	7
第5図 土坑1 (04-00) 平面・断面図	7		
第6図 縄文時代遺構配置図	9~10	第7図 01-0R断面図	11
第8図 10-0R断面図	11	第9図 10-0R出土縄文土器	13
第10図 出土土器	14	第11図 出土石器	14
第12図 調査地周辺自然流路検出遺構配置図	15		
表1 第2図範囲内 縄文時代地名表	4		

図版目次

図版1 a 調査地遠景航空写真	b 調査地全景航空写真
-----------------	-------------

- 図版 2 a 弥生時代遺構面（北東から） b 弥生時代土坑（北から）
- 図版 3 a 縄文時代遺構面全景（西から） b 縄文時代遺構面（北東から）
- 図版 4 a 自然流路 1（01-OR）全景（北西から）
b 自然流路 2（10-OR）全景（北西から）
- 図版 5 a 北西壁断面 b 自然流路 1（01-OR）（西から）
c 自然流路 2（10-OR）（東から） d 自然流路 2 出土自然木（南から）
e 自然流路 2 南側 f 自然流路 2 北側
- 図版 6 a 自然流路 2（10-OR）出土縄文土器
b 出土石器
- 図版 7 a 包含層出土土器 b 自然流路出土種子類（トチ、ドングリ他）



第 1 図 調査区位置図 (1/5000)

第 I 章 調査の経過と方法

第 1 節 調査の経過

都市計画道路は、岸和田南海線泉州地域を南北に縦断する府道大阪和泉南線のバイパスの一部として計画された。そのうち、槇尾川以南については和気遺跡の範囲内であったために1985年度に大阪府教育委員会が発掘調査を行っていた。更に松尾川以南については遺跡の範囲外であったが、1987年度に大阪府教育委員会により試掘調査行い和泉市の部分を小田遺跡と認定され、当協会が関西国際空港関連事業の一環として発掘調査を1988年度より2年度にわたり本調査を行ってきた。

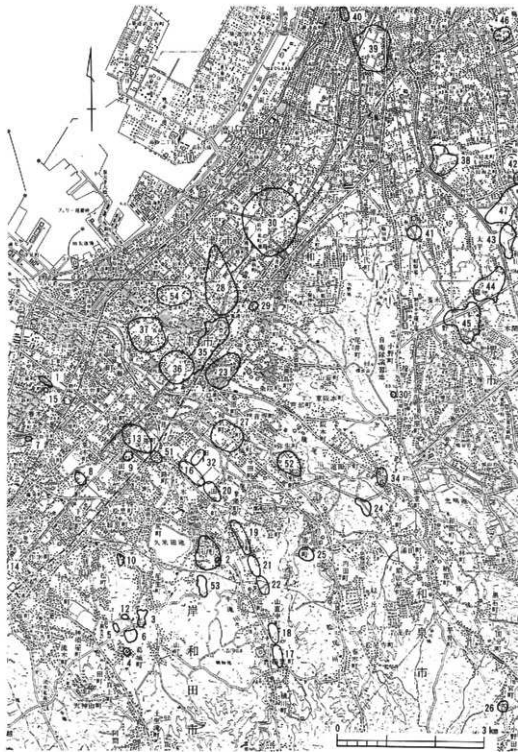
この度、都市計画道路大阪・岸和田・南海線が府道岸和田牛滝山貝塚線（都市計画道路磯ノ上山直線）に接続する岸和田市域部分の建設が計画された。この地域は大阪府文化財地図によると軽部池西遺跡の範囲内であるため、岸和田土木事務所と大阪府教育委員会の協議の結果、当協会が小田遺跡に引き続き調査することになった。そのため、発掘調査の6月初めに準備工を行い、現地調査は6月12日より8月27日まで行った。

第 2 節 調査の方法

軽部池西遺跡や小田遺跡で自然流路が検出されており、今回の調査でも自然流路の続きが検出される事が予想されたため、調査に入る前に調査区に隣接する水田部分と府道岸和田牛滝山貝塚線部分の3方について鋼矢板を打ち調査を行った。掘削土は北西に接する水田の一部を借地し、借り置きをして調査後埋め戻しを行った。

遺物の取り上げは、当協会が定めている座標系に従い、4mメッシュで行った。遺構番号は通し番号とし、その後に遺構の種類を略号を付属した。略号は当協会で用いているもので、本報告書で関係するものを挙げておくと、土坑はOO、ピットはOP、自然流路はORである。

側溝により層を確認しながら、掘削を行った。検出した面は2面である。上面は、遺構のある部分にメッシュによる手実測を行い、下面については、ヘリコプターにより航空測量を行った。さらに下層を確認するために、側溝以外に10-ORの部分にトレンチを入れ確認調査をして調査を終了した。



第2図 縄文・弥生時代主要遺跡地図

第II章 遺跡の環境

岸和田市は、大阪府の南西部に位置する。北東部は大阪湾に面し、南は和泉山脈を隔てて和歌山県に接する。北は忠岡町、東は和泉市、西は貝塚市と隣り合っている。軽部池西遺跡は岸和田市今木町に所在する。和泉山脈を水源とする牛滝川、松尾川が合流する南側の低位段丘面に立地している。

当遺跡周辺の縄文時代の遺跡の分布は、3つのタイプの立地に分かれると言われる。まず、天の川や春木川の下流の砂丘上に位置する春木八幡山遺跡や加守三昧山遺跡などの標高10m未満に位置するもので、春木八幡山遺跡は、中期から晩期までの土器を出土している。第2のタイプは、低位段丘から中位段丘にかけて立地するものである。中期の土器を出土する箕土路遺跡、自然流路内などから後期の土器を出土する小田遺跡、後期から晩期にかけての土器・黒曜石製の石器・石器製作時のチップが出土した山ノ内遺跡、後期の土坑・埋甕が発見された万町北遺跡、土面や中期末から後期にかけての住居跡、土坑が検出された仏並遺跡などがある。最後のタイプは南に位置する葛城山頂にいたる場所に位置するもので標高500mの山頂でも中期から後期の土器が出土している。軽部池西遺跡は、小田遺跡と一連の遺跡群と考えると良いと思われる。これまで両遺跡では顕著な遺構は確認されておらないが、縄文時代と思われる自然流路を何条か検出している。

和泉地方の弥生時代の集落は、前期中葉から始まる石津川水系の四ツ池遺跡で幕を開ける。大津川水系の池上遺跡は、やや遅れて出現する。中期になるとそれら拠点集落の周辺にも小規模な集落が点在し始める。牛滝川もしくは松尾川水系に属する軽部池西遺跡もこうした集落の1つと考えられ、これまで中期の堅穴住居跡や後期の土器などを検出している。周辺には中期後半の和気遺跡、後期まで存続する田治米菅原遺跡・山ノ内遺跡などがある。和気遺跡では、土坑の底に襖を敷いた特殊な遺構も確認された。山直中遺跡では土器のみであるが、中期のものが存在する。後期になると拠点集落であった四ツ池遺跡や池上遺跡が解体を始め、いわゆる「高地性集落」と呼ばれる観音寺山遺跡に大規模な集落が営まれる。後期まで存続する中期より存続する遺跡は観音寺山遺跡を営んでいた共同体と深く結び付いていた可能性も考えられる。終末期の集落は、和気遺跡で堅穴住居跡や掘立柱建物、西大路遺跡でも集落が確認されている。

表1 第2図範囲内 縄文時代地名表

岸和田市

番号	遺跡名	所在地	早	中	後	晩	種類	内容
1	春木天の川	戎町				●●	散在地	土器
2	西山	岡山町					散在地	石鏃・石錐・石匙
3	琴山	尾生町					散在地	石鏃
4	三本松下	葛城町					散在地	石鏃
5	上松仏谷尾	上松町					散在地	石鏃
6	荒子	上松町					散在地	
7	加守三味山	加守町					散在地	石匙
8	栄の池	小松里町					包含地	石鏃・石棒
9	下池田	下池田町	○				包含地	有茎尖頭器
10	下松孤塚	下松町					散在地	石棒
11	葛城山頂	塔原町			●●		散在地	土器・石器・石鏃
12	尾崎	真上町					散在地	石鏃
13	箕土路	箕土路町			●		包含地	土器
14	宮本町	宮本町					散在地	石器
15	春木八幡山	八幡町			●●●		包含地	土器・石鏃・石鏃
16	経部池西	今木町	○		●●●		集落跡	有茎尖頭器・土坑・石棒・磨斧
17	芝ノ垣外	稲葉					包含地	石鏃・刃器
18	山直中	山直中町				●	包含地	土坑・土器・石鏃・石錐・石匙
19	三田	三田町	○				包含地	有茎尖頭器
20	山ノ内	田治米				●	集落跡	土坑・土器・石器・土偶
21	上フジ	三田町					包含地	刃器
22	二俣池北	包近町					包含地	石鏃・石匙・刃器

和泉市

23	府中	府中町・伯方町				●●	包含地	土器・石器
24	万町北	万町				●●	集落跡	土器・石器
25	唐国	唐国町					包含地	石鏃
26	仏並	仏並	●		●●		集落跡	住居跡・土坑・土器・土面・石器
27	和気	和気町				●	包含地	土器
28	池上曾根	池上町				●	包含地	土器・磨斧
29	伯方北	伯方町				●●	集落跡	
30	大園	葛の葉町	○				包含地	有茎尖頭器
31	信田山	小野町			●●		包含地	土器
32	小田	小田		●			包含地	土器
33	福瀬	福瀬町				●●	包含地	土坑・ビット・土器・石器
34	池田町	池田下町				●	集落跡	土坑・土器

泉大津市

番号	遺跡名	所在地	早	前	中	後	晩	種類	内容
35	豊中	豊中				●	●	包含地	土器
36	板原	板原				●	●	包含地	土器・石器
37	虫取	虫取町				●	●	包含地	土器・石器

堺市

38	鈴の宮	八田寺町					●	集落跡	土坑・土器・石鏃・磨斧
39	四ツ池	浜寺船尾町				●	●	集落跡	住居跡（後）・土坑・埋壘・土器
40	船尾西	浜寺船尾町					●	包含地	土器・石棒
41	西浦橋	菱木				●	●	集落跡	土坑・土器・石鏃・石錘・刃器
42	平井	平井		●			●	散在地	土器
43	伏尾	伏尾					●	包含地	土器
44	大庭寺	大庭寺					●	集落跡	土坑・土器
45	野々井	野々井	○					包含地	有茎尖頭器
46	百舌鳥陵南	百舌鳥西之町						包含地	石鏃
47	小阪	小阪・平井		●	●	●	●	包含地	土器・石器
48	鴨田池東	鴨田池東					●	包含地	土器・石刀

他 弥生時代主要遺跡など

51 西大路 52観音寺山 53どぞく 54池浦

注) 1 縄文時代地名表については「大阪府縄文時代遺跡一覧表（大阪府立泉北考古資料館 1989 5）」（第7回近畿地方埋蔵文化財研究会資料 1989）の成果による。
また、宮野淳一氏の御教示を得た。

2 基本的に遺跡の範囲は大阪府文化財分布図（大阪府教育委員会 1991）によるが、一部25唐国遺跡 30信太山遺跡は、地点で表した。

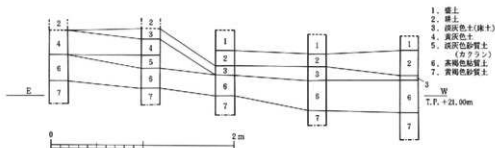
3 11葛城山頂遺跡 14宮本町遺跡 33福瀬遺跡については地図上の範囲内ではなかったがすぐ隣接地ということで表に入れた。

4 本文の記述にあたっては、以下の本を参照した。
岸和田市史編纂委員会『岸和田市史』第1巻 1979
石部正志『大阪の古墳』松籟社 1980

第三章 調査の成果

第1節 基本層序

調査区の調査前の現況は、南東側にある軽部池から水を引き水田化していた。2枚の水田にわたっており、南東から北東に向かって低くなっている。耕土15~20cm、床土約10cm、その下が、弥生時代ベース面と思われる茶褐色粘質土が堆積する。さらに、それを除去すると黄褐色砂質土の層にいたる。検出した2つの自然流路は、いずれもこの面で検出した。なお、耕土を除去すると床土が検出されるが、特に南東側の1段高くなった面では明灰色砂を埋土とする深さ20cmの土坑を検出した。おそらく、粘土採りの穴と思われる。



第3図 南西壁柱状土層図 (1/40)

第2節 弥生時代の遺構 (第4図、図版二a)

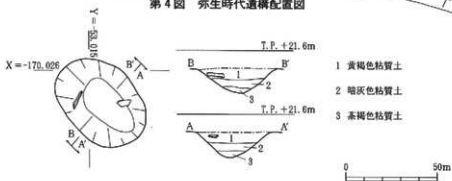
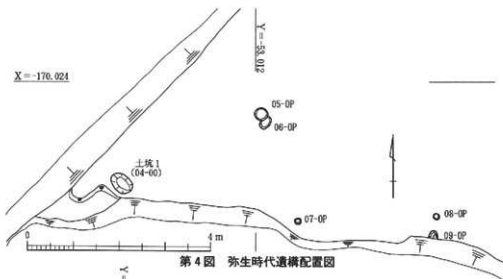
茶褐色砂質土をベース面とする。面的には、後世の削平によって、遺構が削られていると考えられる。1段高い面の粘土採りのあまり及んでいない部分でかろうじて土坑1、ピット5、を検出した。

土坑1 (04-00) (第5図、図版二b)

長径54cm、短径38cmの楕円形を呈し、深さ15cm測る。埋土は、3層に分かれる。最上層で壘もしくは壘形土器の細片が出土した。2片出土したが、別個体である。細片であるため、時期は、詳細は不明であるが、検出面に至るまでに出土した土器や擾乱から出土した土器などから考えて弥生中期頃と思われる。

ピット (05-OP~09-OP)

05-O Pは、径25cmで深さ18cmである。埋土は、いずれも黄褐色粘質土である。06-O Pは、長径28cm、短径20cm深さ8cmと浅い。05-O Pに切られている。07-O Pは、1辺12cmの隅丸方形を呈する。08-O Pは、径12cmで深さは、18cmである。09-O Pは、攪乱で一部を切られており全形は、わからないが、短径18cmの楕円形と思われる。深さは、15cmで、深さ8cmのところ、径が短径10cm程になり、2段掘り状になっている。埋土は、いずれも黄褐色粘質土である。切り合いから、06-O P→07-O Pの2時期考えられる。時期的には、04-O Oとほぼ同時期と考えられる。これらピットの性格としては、竪穴住居などの柱穴などの可能性も指摘できよう。



第3節 縄文時代の遺構（第8図、図版四）

黄褐色粘質土をベース面とする。人為的な遺構は検出されなかったが、自然流路2条を検出した。

01-OR（第6図、図版四a・五a）

調査区の北東隅に位置する。小田遺跡第2次調査a・b調査区で検出された065-ORの続きである。また、軽部池西遺跡の第1次調査で検出された589-ORの続きでもある。南から北に流れていたと考えられている。深さ80cm程検出された。

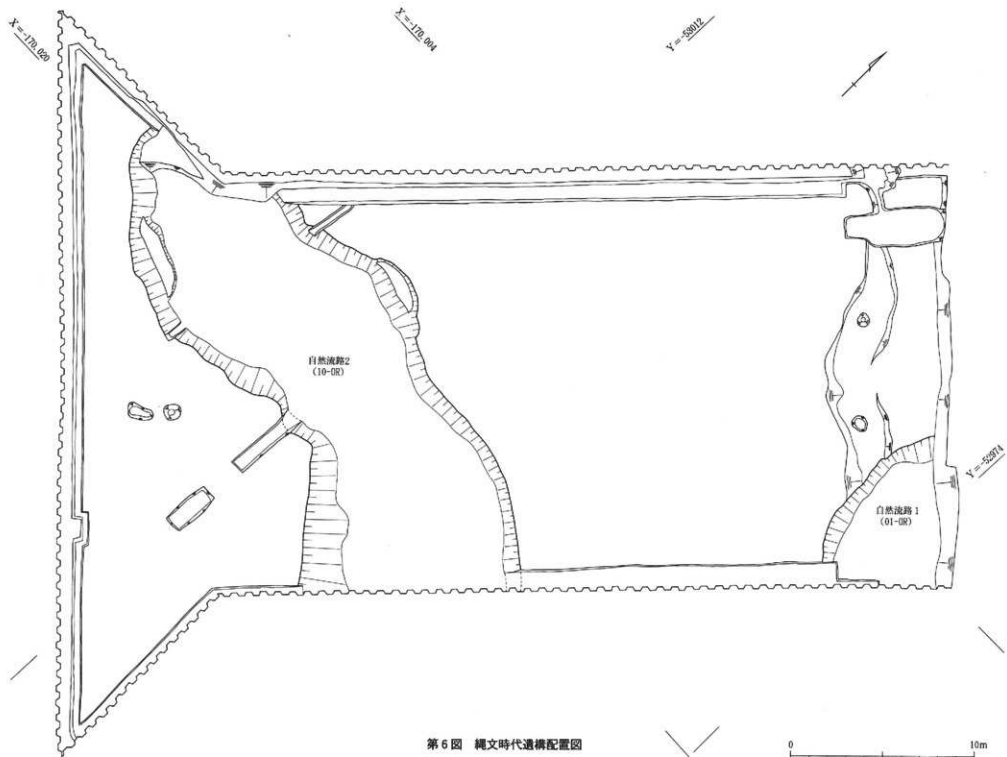
埋土の上層は、一様に25～40cmの灰色粘土が堆積しており、中層は、黒色・灰色・黄色砂や砂質土が入り混じり堆積している。この層の特に黒色の粗砂からトチの実などの植物が検出された。下層は、部分的に異なるが、砂礫層と粗砂層が約20cm程の厚さで堆積している。このような堆積状態から、ある時期（中層が埋没した時期）に砂層で川が一時に埋まり、流路の機能が、失われた跡に水たまり状になり粘土が堆積したことが伺える。

10-OR（第7図、図版四b・五b～f）

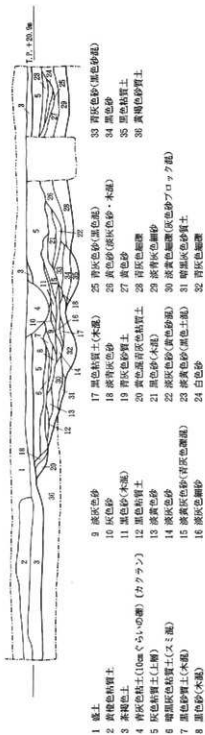
調査区の南半に位置する。幅10～12mで、深さ1.3m程である。なだらかにS字状に屈曲している。流路の方法は、北西から南東に流れていたと推定できる。

検出した状況では、埋土の上層の砂礫層が隆起していた。中層は細砂と粗砂が薄く入り混じり堆積している。中層では、有機質を含む層があり、ドングリなど植物の種子が多数含まれていた。下層も砂礫層細砂の堆積であるが、中層に比べて安定した堆積状態を示す。

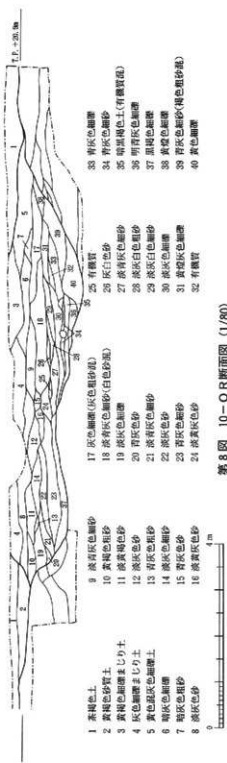
なお、平面的には検出していないが、ほぼ、同じ位置で、やや広い幅で、自然流路があったようで、特に調査区の東部分では、縄文時代面より、2m以上掘削しても砂礫が続くようである。



第6図 縄文時代遺構配置図



第7図 01-O-R断面図 (1/80)



第8図 10-O-R断面図 (1/80)

第4節 出土遺物

10-O Rの遺物

土器（第9図-1~4、図版六a 1~4）

1は深鉢の頸部の破片と思われる。縦方向のLRの縄文の施文が残る。内面は丁寧にナデで整形している。縄文時代中期末の北白川C式に相当すると考えられる。口縁部には横方向の縄文を施文する器形と推定できる。暗褐色を呈す。2は復元径27.0cmの深鉢形土器である。器壁は0.5cm程、外面は茶褐色、内面は暗褐色を呈す。口縁部を肥厚させている。外面の口縁端部に指頭などが残る。頸部外面は、縦方向に指でなでて調整を行っている。内面は口縁端部に沈線を施すが条痕が残る。胎土は、やや粗い砂粒を多く含む。縄文中期末~後期初頃と思われる、福田K II式~北白川上層式に相当すると考えられる。淡黄褐色を呈す。3は復元口径23.6cmの鉢形土器である。器壁は0.6cm程で、器面は、やや磨滅している。灰褐色を呈す。頸部にLRの縄文を施した後に貝殻による沈線を持つ。沈線は丸く途中で途切れており、全面に直線の沈線ではない。北白川上層式に相当すると考えられる。4は外面に2条の沈線を持つ。内面には、条痕が残る。暗褐色を呈す。

石器（第11図-1、2、図版六b 1、2）

1は裁断面のある石器である。重さ3.64gを計る。2は1個面に細かい不規則な刃部を持つ。スクレイパー（刈器）である。重さ19.91gである。

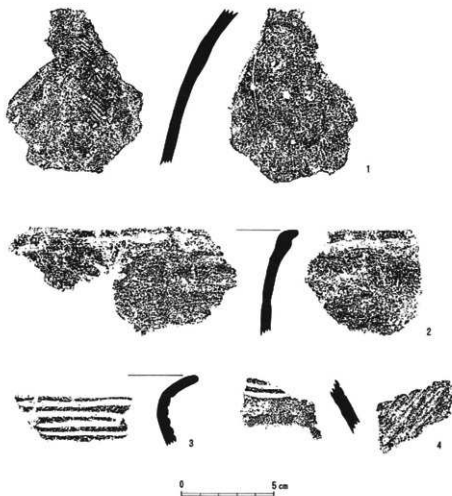
包含層の遺物

土器（第10図-1~3、5~7、図版七a-1~6、8）

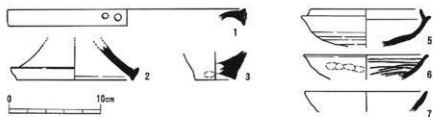
1は復元口径26.0cmの壺の口縁部である。口縁端部が上下に肥厚する。端面に径0.7cmの円形浮文を持つ。淡黄褐色を呈する。弥生時代中期のものと思われる。2は高杯の脚部である。底径12.5cmである。3は壺もしくは甕の底部である。あげ底になっている。淡赤褐色を呈し、長石などの砂粒を多く含む。4は、弥生土器の高杯の脚部である。円盤充填技法による。淡赤褐色を呈し長石などの砂粒を含む。5は口径12.0cmの須恵器の杯身である。青灰色を呈する。6は口径13.6cmの瓦器碗である。外面には、指頭などを残す。内面にはやや雑な暗文を残す。暗黒灰色を呈す。7は口径13.0cmの瓦器碗と思われる。表面が磨滅しており、暗灰色を呈する。調整は不明である。8は瓦質の羽釜である。口縁部に4段の段を持つ。淡灰色を呈す。

石器（第11図-3~5、図版六b-3~5）

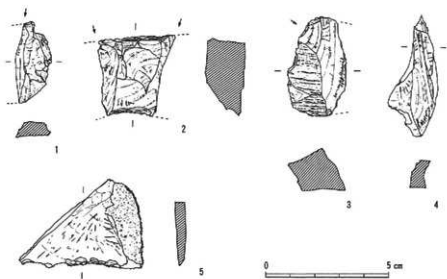
サヌカイト製の製品・剥片が出土した。3は剥片である。重さ14.92gを計る。4は剥片である。重さ6.90gを計る。5は、スクレイパーで2側面に刃部を持つ。重さは8.24gである。サイドスクレイパーとエンドスクレイパーの両方の機能をもつ。1つの刃部は、刃部幅5.0cmで3.0cm程は、細かく刃をつけているが、あとは粗く加工している。もう1面は、丸く湾曲しており、磨滅しているが、細かい刃部を作っていると思われる。材質的にすべてサヌカイトと思われるが、「しま石」と呼ばれる羽曳野市の春日山付近で採れるものと推定されるものが交じっている。



第9図 10-OR出土縄文土器 (1/2)



第10圖 出土土器 (1/4)

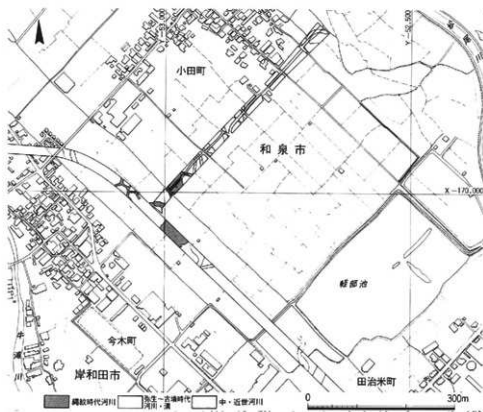


第11圖 出土土器 (1/2)

第Ⅳ章 まとめ

今回の発掘調査の成果は、主に3点にまとめられる。まず、近年の粘土採りなどで遺構面が削平されているものの、弥生時代の遺構面と思われる面を確認できたことである。包含層やピット内の出土土器などから弥生中期ごろの集落の範囲に属することがわかった。2点目は縄文時代については、小田遺跡や軽部池西遺跡検出された自然流路の続きが確認され、新たに縄文中期末から後期の土器を出土する新たな自然流路を確認したことである。流路がどう続くかこの調査区の範囲では不明であるが、縄文時代にはかなり流路が変化していることを示唆してくれた。(第12図)

最後に包含層内から少量ではあるが、古墳時代や14～15世紀の土器が出土したことは、この地もしくは周辺に当該期の遺構が存在するか存在したことが指摘できよう。



第12図 調査地周辺自然流路検出遺構配置図 (1/7500) 【小田遺跡1990改変】

図

版



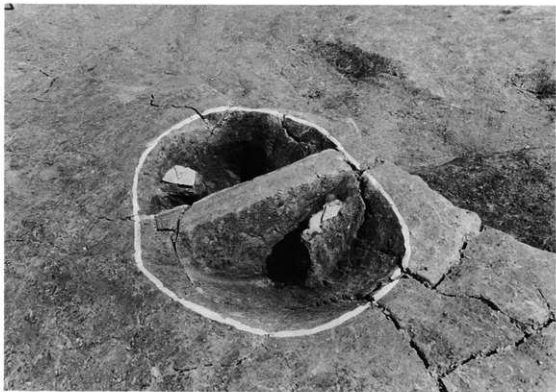
a. 調査地遠景航空写真(南西から)



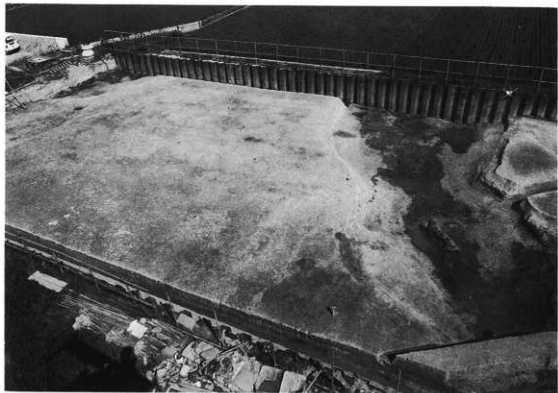
b. 調査地全景航空写真(南西から)



a. 弥生時代遺構面（北東から）



b. 土坑1 (04-00) (北から)



a. 縄文時代遺構面全景（西から）



b. 縄文時代遺構面全景（北東から）



a. 自然流路1 (01-OR) (北西から)



b. 自然流路2 (10-OR) (北西から)



a. 北西壁断面



b. 自然流路1 (01-OR) (西から)



c. 自然流路2 (10-OR) 断面 (東から)



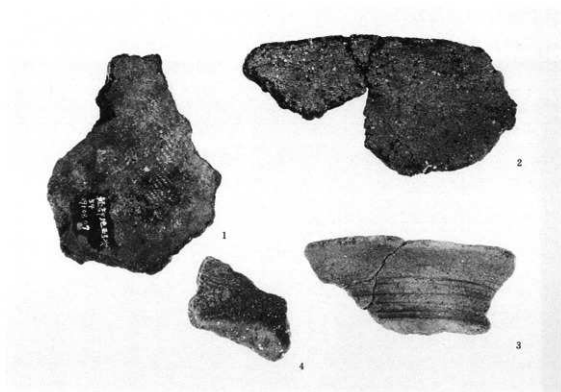
d. 自然流路2出土自然木 (南から)



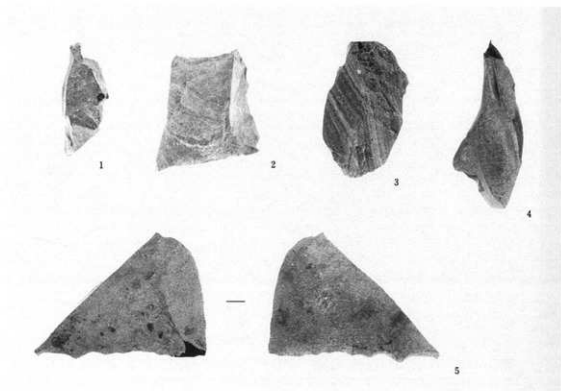
e. 自然流路2 南側



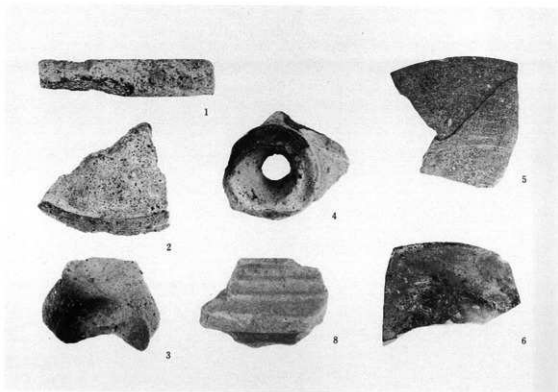
f. 自然流路2 北側



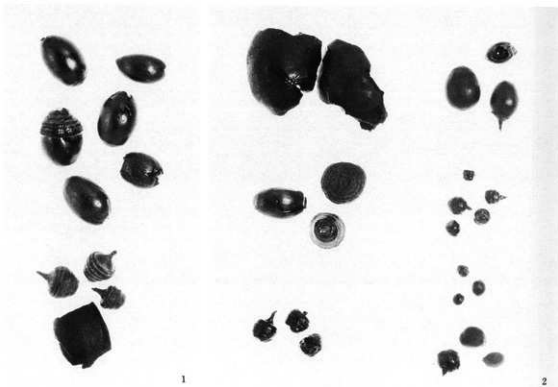
a. 自然流路2 (10-OR) 出土縄文土器



b. 出土石器



a. 包含層出土土器



b. 自然流路1 (10-OR) 出土種子

c. 自然流路2 (10-OR) 出土種子

財大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第70輯

軽部池西遺跡Ⅲ

都市計画道路大阪・岸和田・南海線建設に伴う発掘調査報告書

平成3年8月31日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

大阪市中央区谷町2丁目2番20号 大手前ウサミビル

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

